

音楽素質診断テスト についての一考察 其の一

神田寺幼稚園

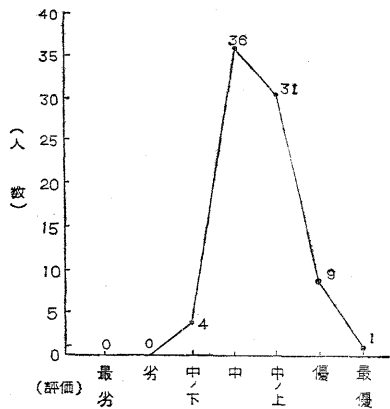
森崎 君枝

当園は東京都心にあり、通園児の殆んどが騒音の中で生活している最も都会的な幼児達である。そのために日常生活に於て音楽的な行動がスムーズに行われない様に思われる。これらの幼児に果してどの程度の音楽的感覚があるかというのが私共の疑問であった。幸い田中教育研究所の懇切な御指導のもとに同所発行の音楽素質診断テストを行う事が出来たので、その結果を御報告する。テスト内容、施行概要については紙数の関係で省略させて頂くが、施行したのは五才児八十五名である。

一、音楽テストの結果

評価点の分布を見ると第一表の通りで、劣を示すものはなく普通の分布状態を示している。第二表(A)は当園の音楽素質の傾向をみるために、音楽感受性能六項目の正答率をとってみたものである。高低弁別が最下位を示したのは幼児が理解しにくい問題の現れであろう。更に問題の難易の程度をみるために、感受性能を十九項目に分類した場合の得点率を示したのが第二表(B)である。上位を占める項

表一 テスト評価段階による分布表



第二表 A) 問題別得点率

順位	項目	%
1	強弱判別	79
2	表現鑑賞	66
3	数長端	65
4	リズム判断	60
5	協和判別	58
6	高低弁別	51

得が必要なもの、複雑な重奏のものとは下降しているのである。特に下位三項目は幼児には理解しにくい問題でもあり結果も香しくない。

二、WISCとの関係

WISC全検査のJQと音楽テスト得点との相関係数をみると第三表の様である。相関は何れも低く、音楽的素質の多くは感受であって、知的理解がさほど影響していない事がはっきりした。ただ低い中でも、比較的相関の高い項目はリズムと強弱で、これは、専門教師によって音符の理解、歌唱、リズムについての指導を受けているので、多少、知的に理解し得て

目をみると、感受を主として処理出来る内容が多く一番得点の低かった高低弁別の中でも、単一音の比較が稍よく、音群相互となると十四位となる。又全体を通じて一つの旋律、音群として把握するものがよく、音符の習

いたと思われる。協和に就ては、当園のみでなく、年令性別を問わず、全く知能との相関がない事が研究所でも表れていた。

第二表 B) 項目別得点率

順位	項目	%
1	速度に対する比較判断	99
2	音群全体の強弱の比較	93
3	演奏中の強弱判断	86
4	協和美醜に対する判断	86
5	旋律的表現に対する審美的判断	79
6	リズムに対する反応並に弁別	77
7	鑑賞力の程度	72
8	二、三、四声重奏に対する比較判断	66
9	休止に対する比較判断	63
10	音の数に対する確認	57
11	単一音に対する音高の比較弁別	56
12	高低数声部重奏に対する比較判断	55
13	類似リズムの確認	54
14	音群相互の高度に対する比較弁別	51
15	音低の比較弁別	49
16	音の長短に対する比較弁別	48
17	重奏される高低両声部に対する強弱判断	44
18	図表と旋律音とに対する相互確認	43
19	リズム的音群の確認	27

三、音楽環境調査との関係

音楽素質と知能との関係は前述の如く低いので、つづいて生活環境の音楽的要素を調査した。(調査内容省略) その結果と素質検査の相関係数表をみると、私共は、幼児時代は特に家庭環境の支配を受け易い時期ですから、きつと音楽的環境との間に何らかの相関があるだろうと思っていたのだ。その予想に反して、相関が低く、現存

第三表 WISC I. Q. との相関係数 $r=0.302$

音楽テスト 知能	高低	強弱	数、長短	リズム	協和	表現、 鑑賞
WISC	0.164	0.352	0.135	0.468	0.088	0.08

てしまい、環境にも恵まれていると即断しがちであるが、これらの検査及調査を知り、今後の指導に当って、新しい道が開けたように思えるのである。

例えば、或る演出のある幼児を素質もあるし環境もよいと考えていたのだが、その音楽検査得点は37、評価段階が中と出た。反対に

第四表 環境調査との相関係数

音楽環境	家族態度	家庭適性	静的	適応性
音楽テスト	0.076	0.075	0.127	-0.022

註

- 家族の音楽的態度……………環境調査…⑤⑥⑦
- 家族の適性……………②③
- 静的環境……………①④⑨
- 子供の適応性……………⑧⑩

第五表 評価段階とピアノを習っている者の関係

人数		評価段階	
		人	人
最優 優上 中中 中下	優	1	1
	優	9	4
	中	51	2
	中	36	なし
	下	4	なし

ふだん非常に消極的で、リズム遊戯は殆んど行わず音楽に対する反応が極めて低い幼児が、音楽検査得点42、評価段階中上と出るのもあった。つまり、音楽の演出力にも、幼児の外向的或は内向的な性格が大いに関連するといえるわけである。それで日常生活に於ては内向性を示すものでも、特に興味

を持つ事には外向的な状態を表現する事もあり得るので、これらの幼児の指導点が明らかにされたわけでもある。環境調査中、楽器や歌を習った事がある者と素質検査の得点が一番関連がある様に思いその関係を見つけたのである。第五表の如く、素質に恵まれた幼児の才能は適当な指導によって伸びると云う万能性を示していると思

う。
以上の様に、本テスト施行の結果は、私共保育者と幼児に対する音楽指導について幾つかの解答を与えてくれた。今後とも適時本テストを施行することにより、幼児の素質を正しく把握し、誘導方向を誤りなく捉えてゆきたいと思つう。

幼児に於ける田中教育研究所編

「音楽素質診断テストについて(その一)」

—主として音楽環境及びWISC結果との比較—

姫路工業大学

守屋光雄

釘宮 牙子

高橋 洋子

〔研究の主旨〕

今回は、田中教育研究所編「音楽素質診断テスト」を用いて、まづクラス(A)としてピアノヴァイオリンなどを習っている者。次にクラス(B)として習っていないが、教師その他によって優れているとみなされる者。更に(C)クラスは、習っていないが、劣っているとみなされる者。例えば音痴とよばれている者や、本人自身が音楽的興味を示さないし教師の評価も低い者の三段階に対象を選び、その年齢層を5才から6才の幼稚園児に限り、本テスト施行上の限界を知ると共に、これにWISC知能診断テストを併用し両者の相関を求めた。即ちこれら三段階の対象群がそれぞれ実際上の問題としての教師その他の評価点と如何なる関係を有しているのか、更に知能もしくわ性格的な因子とどのようにからみあっているのかを探ってみようとしたものである。但し今回は、被験児が少数であり信頼性に乏しい嫌があると思われるが、第一回実験として予備調査的なものとしたい。